

Title	近代ユダヤ哲学と歴史
Author(s)	佐藤, 貴史
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.19-5 : 5-7
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2368
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

近代ユダヤ哲学と歴史

佐藤 貴史

著者は2008年9月から2009年7月まで大木英夫総合研究所所長によりミュンヘン大学プロテスタント神学部での研究滞在が認められ、そこで得た知見に基づきいくつかの研究ノートを『聖学院大学総合研究所Newsletter』に投稿してきた。ここではこれまでの研究ノートも参照しながら、研究滞在の成果を三つの論点に絞って最終報告としたい。

1. 〈方法論〉をめぐって

ヨーロッパ宗教思想史および社会思想史をどのように叙述するかという学問方法論の問題は、「越境する歴史叙述——方法論をめぐる一断片」（『聖学院大学総合研究所Newsletter』、Vol.19-1）と題してまとめた。哲学や神学を徹頭徹尾、「政治と社会の相の下」でとりあげるTheologiegeschichte、個別宗教の垣根を越えながら、「教派的本質主義」を回避しようとする「共有された歴史」——これら学問方法論の問題は、きわめて地味な領域に属すると思われるが、ヨーロッパ思想史を研究する者がつねに立ち返るべきもっとも基本的な論点であることを再認識させられた。

これらの方法論に基づき、著者はプロテスタント神学者E. トレルチとユダヤ人哲学者H. コーエンの方法論と文化総合の問題をめぐる論争を洗い直した。最終的にユダヤ人哲学者F. ローゼンツヴァイクも含めることになったが、著者は20世紀初頭のドイツにおいて多くの知識人たちが宗教間の境界線を越えて、類似した問題意識と語彙を抱え込みながら、きわめてラディカルな仕方でお互い議論を——直接的あるいは間接的に——戦わせていたという事実に気づいた（「〈宗教〉と〈歴史〉をめぐる論争——トレルチ、コーエン、ローゼンツヴァイク——」、第57回日本基督教学会、於北海学園大学、2009年8月29日）。

この問題は、さらにハルナックやレオ・ベック、そしてトレルチやローゼンツヴァイクといった思想家たちのあいだで生じたユダヤ教ないしはキリ

スト教の「本質」とは何か、いや、そもそも「本質」とは何を示しているのかという〈本質〉概念をめぐる論争にもつながっていた。すなわち、近代におけるユダヤ教やキリスト教のアイデンティティの捉えなおしという問題圏が射程におさめられているのである。

2. 〈歴史主義〉をめぐって

ドイツの多くの都市にはユダヤ人に関わる博物館がある。おそらくもっとも有名なものは、D. リベスキンド——彼はアメリカ同時多発テロ事件後の世界貿易センター跡地の再建にも関わっている——による「ベルリン・ユダヤ博物館」であろう。歴史を想起し、記憶を構築するための装置は現代の国民国家のなかにさまざまな仕方で埋め込まれているが、ユダヤ人の暗い歴史はドイツ人にとってたまに「加害者」として想起されなければならないだろう。

著者は「記憶／歴史」（『聖学院大学総合研究所Newsletter』、Vol.18-5）において、記憶／歴史の想起は必要なことだが、同時にグローバリゼーションのなかで急激に変動する社会、そしてそこでなす術もなく、あたかも不可避の運命であるかのように〈いま〉失業した人々にとって過去の歴史／記憶にいかなる意味があるかということ、現代における「反歴史主義」あるいは「利那主義」の問題として提起した。

とはいえ、この問題はすでにヴァイマル期ドイツにおいてもっとも先鋭にあらわれていたのである。価値のアンサーキーを招来する「歴史主義」の不安に直面した若い世代は、〈超歴史〉や〈新しい中世〉という思想を紡ぎ出し、強烈な近代批判を繰り返しながら、「歴史性の呪い」（ローゼンツヴァイク）から逃れようとした（「歴史主義の不安からの解放？——〈超歴史〉と〈新しい中世〉——」『聖学院大学総合研究所Newsletter』、Vol.19-2）。

3. 〈近代ユダヤ哲学〉をめぐって

近年、レオ・シュトラウスの思想はわが国においても積極的に論じられるようになった。そのきっかけの一つとして、今日ではもう話題にのぼることもなくなったが、所謂アメリカ政治における「ネオコン」との関係や、イラクや中東をめぐる宗教対立を背景にして彼を前アメリカ大統領の「知的ゴット・ファーザー」とみなす傾向をあげることができるだろう。しかし、これはシュトラウスの思想を少しでも学んだものであればまったくの見当違いであることがすぐにわかる。すなわちL. バトニツキーがいうように、「シュトラウス自身が……まさに西洋文明の未来のためにイスラム哲学を蘇らせることに専念した」からである。

著者はこれまでの通俗的なシュトラウス像を批判しながら、ヴァイマル時代のシュトラウスと彼に大きな影響を与えたローゼンツヴァイクの関係に焦点を当てた。その結果、これまでシュトラウスのローゼンツヴァイク批判の中心には客観的な律法の歴史化・内在化を試みる「歴史主義者」あるいは「実存主義者」ローゼンツヴァイクという姿があるとみなされてきたが、より詳細に検討すれば彼はローゼンツヴァイクが啓蒙主義の問題を捉え損なっているという問題意識の下、20世紀における「啓蒙主義と正統派の古典的論争」の「取り戻し」あるいは「再理解」を目論んでいたことが明らかになった（「L. シュトラウスによるF. ローゼンツヴァイク批判の射程」、第68回日本宗教学会、於京都大学、2009年9月12日）。

啓蒙主義と正統派、いい換えれば〈知と信仰〉の問題、そしてあらゆる人間領域を包摂する律法という意味では〈政治と宗教〉の関係の捉え直しにも繋がる地下水脈がここには広がっているのではないか。この問題を考えるとき、20世紀初頭のドイツにおいてコーエン、シュトラウス、ローゼンツヴァイク、そしてユリウス・グットマンといったユダヤ人思想家たちを巻き込みながら、近代ユダヤ哲学の捉え直しが行われていたことはきわめ

て興味深い事実である。そのなかでも、最近著者はグットマンの宗教哲学に注目している。

それにしてもグットマンとは誰か——名著『ユダヤ哲学』（合田正人訳、みすず書房、2000年）の著者として、また近年注目を浴びているレオ・シュトラウスとの論争相手として、彼の名前は日本においてほんのわずかに知られているだけである。『ユダヤ哲学』には合田正人氏による行き届いた訳者解説が付され、そこではいくつかの鋭い論点があげられている。

同じユダヤ哲学の歴史家を父にもつグットマンの研究領域は、カント研究、マックス・ヴェーバーやヴェルナー・ゾンバルドを意識したユダヤ人と経済の関係、そして一神教の哲学、とりわけユダヤ教の宗教哲学の三つに分けることができるかもしれない。コーエンとも深い関係にあったグットマンにもやはりカント研究があることは、思想的に重要な事実であろう。その意味では、19世紀以降のユダヤ人思想家によるカント受容は、プロテスタント神学者のカント受容と並行しながらも、いかなる違いを示しながら進んだのだろうか。この問題は、真剣に問われなければならない。

グットマンの宗教哲学の独自性がどこにあるのかも、今後さらに解明される必要がある。というのも、この問題はシュトラウスとの論争に直結し、そもそもユダヤ人にとって〈近代〉とは何であったかを解明するための鍵を提供してくれるかもしれないからである。シュトラウスはある論文のなかで、グットマンの『ユダヤ哲学』の中心テーゼは二つあると書いている。一つは「わが中世の哲学者たちはギリシア的思想に与することによって、神・世界・人間についての聖書の思想を、かなりの程度にわたって放棄した」ということであり、もう一つは「近代のユダヤの哲学者たちは、ユダヤ教の中心的な宗教的信条の本来的な主旨を自己防衛することにかけては、かれらの中世の先行者たちよりずっと成功していた」というものである。すなわち、シュトラウスによれば、グット

マン——実はローゼンツヴァイクも——は「近代のユダヤの哲学は、中世のユダヤの哲学よりもはるかに進歩しはるかに熟達した仕方、信仰と知識、宗教と科学の問題を議論してきた」という認識を保持していたのである。

このような議論は、畢竟、グットマンとシュトラウスとのあいだの〈近代〉理解の違いに行き着くものであり、シュトラウスの問題意識に基づけば、啓蒙主義そして歴史主義を潜り抜けたユダヤ教は、神の啓示＝律法をどのように受け取ることができるのかというユダヤ教の根本問題に深く裒差すものである。あるいは、律法＝法の授与という、ある意味すぐれて政治的な問題に近代の意識の哲学によって蹂躪されたユダヤ教（ユダヤ哲学）はどのようにして接近しうるのか。そして、グットマンの宗教哲学がカント、シュライアマハー、ルドルフ・オットーなどの非ユダヤ系の哲学者——いつてしまえば、プロテスタント系の哲学者・神学者——から大きな影響を受けているという事実を踏まえれば、彼の宗教哲学でユダヤ教を分析できるのかという疑問が出てくる。

ここにはユダヤ人思想家とプロテスタント神学者のあいだで〈共有された歴史〉はいかにして叙述されるのか、近代ユダヤ哲学は啓蒙主義や歴史主義とどのように対峙したのか、近代ユダヤ哲学の〈近代〉とは何を意味しているのか、そして「ポスト世俗化時代」と呼ばれる現代においては政治と宗教のあいだに境界線を引くという試み自体が疑われているが、この問題は西洋においては「ユダヤ人問題」という名の下で論じられてきたテーマ——例えば、マルクスの『ユダヤ人問題によせて』を参照されたい——であり、近代ユダヤ哲学の研究には思いもよらないアクチュアリティが秘められているのではないだろうか。

グットマンの論文はもともと雑誌に発表されたものが多く、わが国で入手することはきわめて困難なものがたくさんある。それゆえ、著者はミュンヘンに滞在しているあいだにバイエルン州立図

書館に通い、できる限り収集することにした。残念ながら、すべてを手に入れることができなかったが、シュトラウスとの論争を理解するうえで必要不可欠な論文などをコピーすることができた。今後、これらの資料を分析し、これまで埋もれていた思想史の水脈を照らし出してみたい。

参考文献

Franz Rosenzweig, "Atheistische Theologie," in *Der Mensch und sein Werk: Gesammelte Schriften III: Zweistromland: Kleinere Schriften zu Glauben und Denken*, herausgegeben von Reinhold und Annemarie Mayer. Dordrecht: Martinus Nijhoff, 1984.

レオ・シュトラウス『古典的政治的合理主義の再生』、石崎嘉彦監訳、ナカニシヤ出版、1996年。

Friedrich Wilhelm Graf, "Geschichte durch Übergeschichte überwinden. Antihistoristische Geschichte in der protestantischen Theologie der 1920er Jahre," in *Geschichtsdiskurs. Krisenbewußtsein, Katastrophenerfahrungen und Innovationen 1880-1945*, Band 4, Fischer Taschenbuch Verlag: Frankfurt am Mein, 1997.

———. *Die Wiederkehr der Götter. Religion in der modernen Kultur*, München: Verlag C. H. Beck, 2004, 2. durchgesehene Auflage 2004, 3. durchgesehene Auflage 2004, 1. Auflage in der Beck'schen Reihe, 2007. (序言と第1章のみ邦訳あり。安酸敏真訳『神々の再来——近現代文化における宗教——』(抄訳)、北海学園大学人文論集、第34号、2006年7月)。

Leora Batnitzky, "Leo Strauss and the "Theologico-Political Predicament"," in *The Cambridge Companion to Leo Strauss*, edited by Steven B. Smith (Cambridge: Cambridge University Press, 2009).

Otto Gerhard Oexle, "German Malaise of Modernity: Ernst H. Kantorowicz and his "Kaiser Friedrich der Zweite" ," in *Ernst Kantorowicz*. Robert L. Benson/Johannes Fried (Hg.), Stuttgart: Steiner, 1997.

(さとう・たかし 聖学院大学総合研究所特任研究員)

【本研究ノートはドイツ・プロテスタント教会奨学金 (Diakonisches Werk der Evangelischen Kirche in Deutschland) による研究成果である】